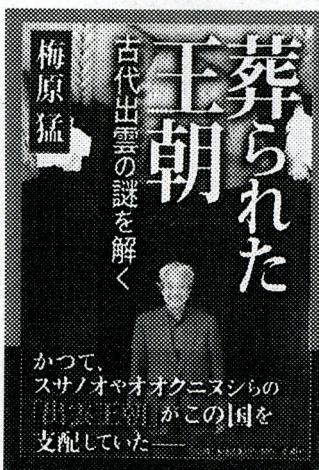


葬られた王朝

古代出雲の謎を解く

一九八四年に荒神谷遺跡から三五八本の銅劍が見つかり、翌年には六個の銅鐸と一六本の銅矛が出土した。一九九六年には加茂岩倉遺跡から銅鐸三九個が掘り出された。そして二〇〇〇年、出雲大社の地下から巨大な柱が出土して、考古学・古代史・古代文学などにかかる者たちを仰天させた。

二〇〇年足らずの間に、直線で二〇キロも離れていたい狭い地域で相次いで三つの大発見によって、古代日本にかかる者たちを仰天させた。



四六判・320頁・2310円
新潮社
978-4-10-303023-2

自己批判して出雲実態論を展開

大転換をもたらすかも知れない書物

三 浦 佑 之

梅原猛といつビッグネームが自らの旧説を自己批判していくからこそ、ヤマト王権の前に出雲王朝が存在したと主張し始めたことに驚きはない。しかし遅きに失したと思うのだが、「我々は学問的良心を持つ限り、出雲神話は全くの架空の物語である」という説を根本的に検討しないければならないことに、今までの「一面しかないだろう。そして、著者の分析の

背景として語られているとおり、斯ナオと新羅との関係や、翡翠を介したニムシ神話の分析作業である。また、スサノオと新羅本海文化全体のありようを考えている研究者やヤマト絶対主義者たちを、梅原論ができる作業は、どう考えた。この本だけではむずかしいでもこの「一面しかないだろう。そして、著者の分析の

を自己批判して出雲実態論を展開し始めたことが、頑固に出雲架空論を墨守する人々を折伏するに大きな力になるのは間違いないだ

今後、より強力に出雲王朝の実在を論証していくため、ぜひとも今回の内容を修正し、深化させてほしい。そのために最低限必要な修正点は以下の二点である。古事記と日本書紀との違いを明確にし、古事記に

は、斯ナオと新羅との関係や、翡翠を介したニムシ神話の分析作業である。また、スサノオと新羅本海文化全体のありようを考えている研究者やヤマト絶対主義者たちを、梅原論ができる作業は、どう考えた。この本だけではむずかしいでもこの「一面しかないだろう。そして、著者の分析の

ない。いささか焦っていたところに、大転換をもたらすかもしれない書物が出現した。慶ばしいことである。わたしには疑問に思う。わたしは称赞を惜しまない。なぜなら、今後の古代研究の進展に大きく寄与するのではないかと期待を寄せせるからである。

本書は、二つの面から出雲王朝の実在を考えようとする。一つは、古事記・日古事記の出雲神話はそれを

手書きについて、直接本書にあたって確認していただきたい。さすがと思われるところが随所にある。わたしには疑問に思う。といふもあつたが、納得できるところが多くあり大筋では認めてよいと思う。ただ、そう思っているのは、古代日本列島において出雲が大きな力をもつ集団として実在し、

教授・古代文学研究専攻
★うめはら・たけし氏は哲学者。立命館大学教授、京都市立芸術大学学長、国際日本文化研究センター所長等を歴任。九年、文化功労者。九年文化勲章受章。著書に「隠された十字架」「水底の歌」があるが日本書紀には出雲神話が存在しないということを論理的に説明する。そうすれば、藤原不比等の呪多數。一九二五(大正14)年生。